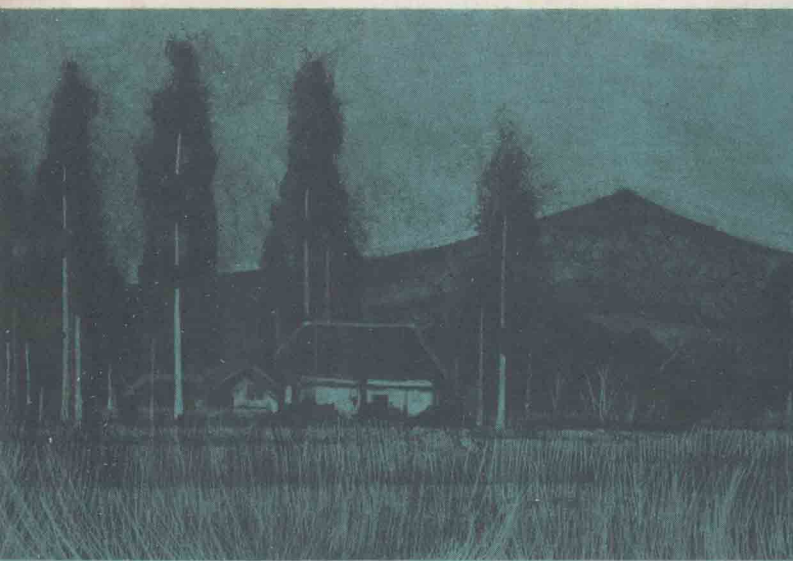


# 石川啄木

日本詩人全集 8



# 石川啄木

日本诗人全集

8

新潮社版

日本詩人全集 8

石川啄木

昭和四十二年一月十日 発行  
昭和五十四年三月十五日 十四刷



価800円

Printed in Japan

1967・1

© SHINCHOSHA

著者 石川啄木

編者 山本健吉

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部東京(03)五一一一

編集部東京(03)五四一一

振替東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小  
社通信係宛御送付下さい。送料小  
社負担にてお取替えいたします。

目次

石川啄木・人と作品

(山本健吉)

七

「一握の砂」

(序)

我を愛する歌

(藪野椋十)

三

煙

秋風のころよきに

忘れがたき人人

手套を脱ぐ時

三

二

三

五

三

九

「悲しき玩具」「一握の砂」以後

六

(あとがき)

(土岐哀果)

二八

短歌・補遺

三三

「あこがれ」

沈める鐘(序詩)

杜に立ちて

隠沼

森の追懐

鶴飼橋に立ちて

ひとりゆかむ

我なりき

閑古鳥

ほととぎす

マカロフ提督追悼の詩

ひとつ家

あゆみ

眠れる都

古瓶子

一四

一七

一四

一四

一四

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一六

「あこがれ」以後

第二集の初めに

花ちる日

琴をひけ

落日

東京

深みの心

たはぶれ

かりがね

雨にぬれて

幕びらき

花ちる日

吹角

公孫樹

一三

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

泣くよりも

窓

何故に

白き顔

泣くよりも

嫂

殺意

弁疏

小さき墓

黄草集

さすらひ心

古苑

香盞

明滅

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

江畔雜詩

さみだれ

啄木鳥に

洪民村小吟

春月

友藻外に

山杜鵑

雪の夜

ハコダテの歌・その他

ハコダテの歌

水無月

年老いし彼は商人

辻

蟹に

馬車の中

恋

小樽のかたみ

夕暮

燕

雪の夜

「釧路新聞」より

幽思

今聞ゆ

無題

青き家

失せにける色赤き花

一五

一五

一六

一六

一七

一七

一六

一九

一九

二〇

今聞ゆ	二〇一	冬の夜	二二
無題	二〇二	無題	二二
「明星」より		無題	二二
老人	二〇三	断章	二四
白骨	二〇三	渡鳥	二六
おどろき	二〇四	破れた腰掛	二六
書簡・日記より		心の姿の研究・呼子と口笛	
無題	二〇五	心の姿の研究	
戯作	二〇九	夏の街の恐怖	二七
無題	二一〇	起きるな	二八
新らしき都の基礎	二一一	事ありげな春の夕暮	二八
ノート・原稿より		柳の葉	二九
一塊の土	二二	拳	二九

騎馬の巡査

三〇

呼子と口笛

はてしなき議論の後

一 三〇

二 三三

三 (ココアのひと匙)

三三

四 (書齋の午後)

三三

五 (激論)

三三

六 (墓碑銘)

三三

七 (古びたる鞆をあけて)

三五

八 (呼子の笛)

三五

九 (明るき午後)

三六

(十) (家)

三六

(十一) (飛行機)

三六

散文詩

曠野

三九

二人連

三三

★

林中日記

三五

食ふべき詩

三五

性急な思想

三六

時代閉塞の現状

三七

一利己主義者と友人との対話

三三

歌のいろく

三九〇

所謂今度の事

三九七

★

解説

(山本健吉)

三〇五

石川啄木年譜

三六





## 石川啄木・人と作品

## 一

その死後五十年を過ぎて、啄木のように広汎な読者を持っている文学者は、漱石を除けば外にはない。啄木追慕の文献は、すでに山をなし、しかも未だに彼は次から次へと出てくる若い研究者たちの研究意欲をそそって止まないのである。二十七歳で死んだ啄木の、どこにそれだけひとびとを惹きつける魅力がひそんでいるのか、考えると不思議である。

啄木は短歌を作り、詩を作り、小説を書き、評論を書いた。それに、その書簡と日記とは、彼の思想と生活とを知る上に大事な文献であるばかりでなく、それ自身すぐれた文学作品として読者に大きな感動を与えうる性質を持っている。稀な青年天才詩人としてその死を愛惜された啄木の、その死後に積み上げられた研究史は、日本の「明日」に思いを馳せた思想家啄木の肖像を、次第に雪達磨のように太らせて行った。そしてそれは戦後に到って、それまで長く函館図書館に閲覧禁止の文書として秘蔵されていた日記や、幸徳事件についての彼の反応と関心の深さを物語る文章が公刊されるに到って、頂点に達したかのように見える。

だが、思想家啄木が大きくクローズアップされるにつれて、ややともすれば、詩人啄木、ことに彼が

「悲しき玩具」と称した小詩型文学としての短歌の作者啄木が、軽く見られる風潮も出て来たのである。

そこに感傷家啄木のみを見て、思想家啄木はかすんで見えるという不満であった。だが考えてみると、詩人啄木と思想家啄木とが別人でないかぎり、それは間違ひなく一人の人間の「生」の両面を示しているものであり、そこに矛盾しか見ない論者は、言わば統一の論理を持ち合わせていないだけのことである。

ところで啄木が、今日に到るまでわれわれの胸に生きているのは、何よりもまずその短歌によって、愛すべき二冊の短歌集によってなのである。それは啄木自身の意図、願望がどうであつたにせよ、嚴然とした事実なのである。だからもし、彼があるいは長詩の作家として、小説家として、日記作者として、あるいはまた思想家として、如何にすぐれていようと、彼の短歌が子供だましの感傷に過ぎぬものであつたら、彼の今日の名声は不当のものとなる。多くの読者は、何よりもその短歌を愛し、短歌を愛するがゆえに、その詩、小説、日記、評論その他の著述を読み、その生活と思想とに興味を馳せる。啄木の文学の魅力について言おうとすれば、何よりもまずその短歌の魅力について顧みなければならぬのだ。

## 二

明治三十年代の詩歌壇は、与謝野鉄幹の主宰する新詩社のロマンティシズムの制期<sup>せいば</sup>である。当時詩歌に志を持つ多感な青少年たちの多くは、新詩社に投じ、『明星』を舞台として文学者としての第一歩を歩き出した。鳳晶子<sup>ほうしょうし</sup>（与謝野晶子）はもとより、高村光太郎、北原白秋、吉井勇、木下杢太郎、平野萬里、茅野蕭々、萩原朔太郎、佐藤春夫、堀口大學と、その名を数え上げることができるが、啄木もまたその例に

洩れなかった。

啄木が中学生時代を送った盛岡の青年たちのあいだには、文学熱が盛で、数種の同人回覧誌が競い合っていた。始めナポレオンが好きで、海軍軍人を志望した啄木は、上級生の及川古志郎（後の海軍大将）に近づき、その感化で新派の短歌や新体詩を読むようになった。及川のすすめで、当時花明と号して、発刊されたばかりの『明星』に短歌を投じていた上級生金田一京助を訪ね、彼もまた三十四年春ごろには新詩社の社友となった。

当時啄木が作っていた回覧雑誌『爾伎多麻』によって、彼の歌を見ると、

人けふをなやみそのまま闇に入りぬ運命のみ手の呪はしの神

といった、悪く象徴的で、意味朦朧とした、新詩社風の模倣歌である。当時の啄木について最もよく知る金田一氏は、彼の歌が晶子の口真似であり、肉筆のカットは『明星』の一条成美画伯の透き写しであり、書体は及川そっくりであり、要するに「真似し小僧」だったと回想している。『明星』に短歌を投ずるようになってからも同様で、鉄幹のすすめで長詩に転ずるようになってからも、薄田泣菫、蒲原有明の新しい詩風の、実に堂に入った模倣であった。また文章を書けば、高山樗牛、上田敏式の雅文体であった。

明治三十六年十二月の『明星』に、彼は初めて啄木の号を用いて「愁調」と題する四四四六調のソネット（十四行詩）を発表し、以後精力的な長詩制作をつづけ、三十八年五月には、七十七篇の詩篇を集めた詩集『あこがれ』を、二十歳にして刊行した。上田敏の序詩と鉄幹の跋文とがつけられ、扉には「此書を尾崎行雄氏に献じ併て遥に故郷の山河に捧ぐ」という気取った献辞が書かれている。この一巻の詩集で、

天才啄木の名が詩壇に喧伝けんでんされるに到った。森鷗外が「有明は泣菫にまさり、啄木は有明にまさる」と言つたということが、まことしやかに伝えられたりした。

だがこの詩集は、今日ほとんど読まれることはない。それは必ずしも泣菫、有明の模倣であるからばかりではない。啄木の短歌や、後期の詩や、評論、日記などが、繰り返し読まれ、論じられているのと、あまりに顕著な対照をなしている。それはこの「あこがれ」の詩境が、どのように少年の絢爛げんらんたる詩才、むしろ修辭の才を誇つていても、それは要するに、彼がやがては脱ぎ棄てなければならぬ余計な衣裳いしやうに過ぎなかつたからである。

後に啄木は、憑つかれたように作つた当時の詩について、次のように言っている。——「自分で其頃の詩作上の態度を振返つて見て、一つ言ひたい事がある。それは、実感を詩に歌ふまでには、随分煩瑣はんさな手續を要したといふ事である。譬たとへば、一寸した空地に高さ一丈位の木が立つてゐて、それに日があつてゐるのを見て或る感じを得たとすれば、空地を広野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人にした上でなければ、其感じが当時の詩の調子に合はず、又自分でも満足することが出来なかつた。」(食くふべき詩)

### 三

啄木の短かつた生涯については、すでに詳細な伝記が書かれており、その回想記も親しかつた人たち、少くともそのある時期において親しく交わつたすべての人たちによつて、洩れなく書かれていと言つて

よい。さらにその短歌や詩、散文などに出てくる人たちのモデルなども驚くべき熱心さ、執拗さで穿鑿され、それは作家論、作品論などの文学研究の範囲を超えて、啄木学ともいうべき異様な学問をそこに成立させているように見える。そして未だに対立点を含んで争われている問題として、例えば、啄木が生れたのは明治十八年なのか十九年なのか、啄木の妻節子の節操を疑う発言が近親からなされているのは真実か否か、また明治四十四年夏ごろ啄木が金田一家を訪ねて、自分はいま思想上の一転機に立っていると言いつつ、今の自分の懐く思想は社会主義的帝国主義（あるいは国家主義）とも言うべきものだと告白したことは、どのように解すべきか、などといった問題である。あるいはまた、彼の有名な短歌の「東海の小島の磯」とは、具体的にどここのイメージであるのか、また「手が白く、且つ大なりき」と詠まれた「非凡なる人」といはるる男」は、誰であったか、といった問題がある。これらの問題の中には、金田一氏が投じた問題の如き、啄木の思想の中核に触れてくる大事な問題を含むとともに、啄木の詩歌を味わうためにはどうでもよいような些末な問題を含んでいる。だが、たとえそれは些末ではあっても、少しでも啄木の人と文学とに触れた者なら結構その争点に参加することができ、それはまたそれで彼等に考証的あるいはクイズ的な楽しみを与えてくれる性質のものなのである。

啄木の伝記上のそのようなテールの追求が、限なく行われ、今後ますます行われるであろうということは、結局世のタクボキアンの人口の層の厚さを物語るのであり、それは窮極において、啄木の文学の強い魅力と、啄木の思想と生活との持つ問題が今も変わらず生きていることに帰着する。その片言隻語まで収集意欲に駆られ、書簡、日記、ノートの類まで大事なものとしてあつかう点において、タクボキアン

はソーセキストと相並ぶであろう。日本の知識人にとって、今日でも生きた考察の対象となる点で、啄木の「時代閉塞の現状」に匹敵するものは、漱石の「現代日本の開化」だけである。

#### 四

『あこがれ』を出版したばかりの啄木は、翌月は悄然と東京を去って、盛岡に帰らなければならなかった。前年の暮、父一禎は渋民村宝徳寺住職の地位を追われ、盛岡の新居には、長い恋仲であった堀合節子が新妻として待っていて、啄木の双肩に石川一家の生活がのしかかっていた。彼の生活苦はここに始まったのだが、三十九年四月には、彼は渋民村役場に出頭し、「渋民尋常高等小学校尋常科代用教員を命ず、但し月給八円支給」という辞令を受け、尋常第二学年の教壇に立つこととなった。

自負心の強い天才気取りの彼が、四人の教員のなかの最下の地位に堪えることができたのは、自分がただの教育者でなく、詩人であるという誇りを抱いていたからであった。彼にはもちろん一生を教壇に捧げようという気持はなかったが、ある期間自分の時間をこの教育のために費してみたいという気持がないわけではなかった。彼はみずから「日本一の代用教員」と号し、教育を自分の理想生活の一つと見なし、「詩人のみが真の教育者である」と考え、「詩人は人類の教師である」と言った。

彼によれば、芸術（詩）としての教育が理想的な教育なのである。教育とは「芸術の中の一含蓄」なのである。古来の大芸術品は、必ずそこに何らかの「深大久遠なる教訓」が含まれている。教育が詩（芸術）の内容（生命）と分離して、実際的、功利的になったとき、それは空虚であり、死物であり、残骸で

ある（『林中日記』）。だから彼は、詩人としての自覚と責任とにおいて、教育のことにたずさわろうとしたのである。教育者と詩人とを不可分離のものと考えたとき、彼は『明星』の星童派せいどうは的なロマンティズムから遙かに離れていた。これは自我の拡充を目ざした彼のロマンティズムの行き着くところであった。

これより前、明治三十七年に彼はワグネルの研究に没頭しているが、彼が傾倒する詩人としてワグネルを選択したとき、彼の詩と詩人についての考えは、『明星』流の考えを一步超えていた。それは詩人の社会的、国家的使命の自覚と言ってもいいもので、彼においては、すでに詩が詩であることのみを目的とすることを止め、ワグネルと同じくそれは国民的教化の一翼を担うもの、むしろその最高の表現としての詩という考え方に近づいた。彼の言葉を用いれば、「自己発展と自他包融ほうちゆう、換言すれば意志と愛との、完全に表示された者」であった。ワグネルについて彼に示唆を与えたのは、姉崎嘲風せいきやうふうであった。そして彼が嘲風に近づいたのは、それが彼の傾倒する故高山樗牛ちよぎやうの親友だったからである。

啄木のロマンティックな天才意識は、樗牛の思想を継承している。中野重治氏が、人生の全般的考察を屈指した明治の文学者として、透谷、二葉亭、独歩、啄木の系譜を挙げたのは、その後の啄木観に方向を与えたものだが、その一方に、樗牛、啄木、佐藤春夫、太宰治とつづく純粹ロマンティックの使徒たちの系譜がある。啄木は浪漫主義を克服して自然主義者となり、自然主義を超えて社会主義者となったとも言われるが、それは彼が生涯浪漫主義者として終始したその色合いの推移だとも言える。そして樗牛と啄木とを結びつけるものは、その天才主義においてであり、天才とはその使命観に目覚めた詩人の謂いひであった。そして、そのような啄木の思想的動きには、日露戦争とその戦捷せんしやうとの反響も認められるのである。



明治三十九年に啄木は小説『雲は天才である』を書いた。彼の代用教員としての経験に基づいたもので、主人公新田耕助はみずからジャコピン党（革命健児）と称する生徒たちを結集して、その胸に火を点け、俗物の校長たちに反抗して騒動を起す。彼は藤村の『破戒』に対して「天才ではない、革命健児ではない」という批判を下している。詩人と革命家という意識が、ひどく強気で気取った演技の中に表現されている。村の人たちから由比正雪だと言われ、何時も左肩をいからせて威張った風に歩いていた啄木の稚氣や気取りや誇りを含めての、理想と責任とに燃える、むしろ理想と責任とを一人で背負って立ったような姿が、この新田の中に描き出されている。そこには、樗牛流の天才主義、英雄主義が尾を引いているのだ。だが、ともかく少年たちに人生の教師として対することを、自分の詩人としての使命であると感じ、全身的にその仕事に没頭しようとしたところに、彼が個人対社会、国家、民族の問題を意識し、自己発展と自己包融との統一を考え、個我中心のロマンティズムを超えようとする方向に向っていたことを、納得することができるのである。

## 五

明治四十年四月、高等科の生徒たちを引率して、校長排斥のストライキを起し、校長を転任させるとともに、自分も免職となった。五月には一家を離散し、彼は北海道に渡り、函館の苜蓿社同人たちの客となり、以後札幌、小樽、釧路と流寓して、その生活は、四十一年四月、単身上京するまで続いた。この北海道時代は、後に短歌の中でいろいろと回想され、それは『一握の砂』の重要な部分をなしている。この